

---

フィニット・ストラトス～ バニシング・トルーパー リバース ～doll's dream～

こもも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS ー インフィニット・ストラトスー バニシング・トルーパー  
ー リバース ー doll's dreamー

### 【Nコード】

N2379X

### 【作者名】

こもも

### 【あらすじ】

<IS ー インフィニット・ストラトスー バニシング・トルーパー>を反転して、ISのキャラをOG世界観に入れたものです。こっちはすこしアダルティな感じでいくつもりで、設定もまったく違いますので、ご注意を。

十話内で完結するのを目指してますが、不評だったら削除しますので、遠慮なく意見をください。

## Chapter - 01 戦（前書き）

衝動的に書いたものです。どうか意見をください。

## Chapter - 01 戦

「……りんご、剥けたよ」

ウサギの形のりんごを載せた皿をオーバートーブルに置いて、中学校の制服を着ている銀髪少年がベッドの上で上半身を起こしている三十代の金髪女性に話しかけた。

「ありがとう」

「あつ、ちょっと待って、俺が食べさせるから動かないで」

淡々な微笑を浮かべて、真っ白で血の色が見えない唇を動かして弱々しい声で返事をした女性は、その酷く痩せた白い手首を伸ばそうとした。それを手で制した少年は爪楊枝でりんごを刺して、女性の口元へ持つていく。

白い壁に白いシート、そして鼻を刺激してくる消毒液の匂い。

ここは、病院の個室。

「うん、美味しいね。さすが」

「いやいや、りんごの味は俺と関係ないから」

ゆつくりとりんごを咀嚼して喉に飲み込んだ後、女性は満足そうな笑顔を見せると、少年は照れくさそうに顔を逸らした。

「……もう一個食べるか？」

「ありがとうね、でももういいの。残りはあなたが食べて」

「そうか」

刺したりんごを自分の口に放り込んで、少年は窓の外へ視線を向けて青空を上げる。

りんごを咀嚼している顎の動きが、段々と止まっていく。

「……あの子のこと、考えてる？」

「えっ!？」

しばらくの静寂の後、女性の言葉に驚いた少年は、視線を外から女性の顔に戻す。

女性は、申し訳なさそうな苦笑いをしていた。

「あの子を父親のところに行かせたこと、本当は怒ってる？」

「……いえ、仕方ないって分かってるから」

「ごめんね、本当に。私の病気のせいで二人は……」

「だから、理解してるって。それより今日は話したいことがある」  
爪楊枝を置いて、少年は姿勢を正して真剣な眼差しで女性を正面から見据える。

「話？ 進路のことかしら？」

「はい。実は俺、軍に入ろうと思ってる」

「……軍に?!」

その単語を聞いて、穏やかだった女性の顔色が一変した。

「どうして!？ あんなに頑張ってバイトしたのは学費を溜めるためじゃないの？ あっ、まさか……!!」

保険と貯金だけで長時間にわたってこの病院の医療費を支払えるなんて、前々からおかしいに思っていた。

「そんな……また私のせいで……!!」

「勘違いするな。金は大事な時のために溜めたものだ。今のようにな」

「でも……!!」

「とにかく、今連邦軍の徴兵条件はかなりいいみたいだから、行ってみようかと。このままだと、おばさんの病気が治っても帰る家なくなるからな。……って」

「……ごめん。本当にごめんね、本当に……」

「泣くなよ……女の涙に弱いんだよ俺は」

ハンカチを出して、少年は女性の目元から零した涙を拭き取る。

「……おばさんは俺を拾ってくれたし、学校まで行かせてくれた。これくらいの役も立たないと、罰が当るよ」

「本当にごめんね……苦勞させてしまつて」

「何言つてるんだ。家唯一の男がこれくらいしかできないなんて、俺の方が情けなくて穴があつたら入りたいくらいだよ。とにかくおばさんの治療費は俺が何とかするから、早く病気を治して俺たちの家に戻るう」

ハンカチをポケットにしまつて、少年は女性のその骨まで瘦せた白くて細い手を握つた。

「……シャルも連れ戻して、さ」

「ありがとうな、クリス」

それが、女性からの精一杯の感謝。

そして、クリスと呼ばれた少年が自分にとって一生の恩人との、最後の会話だつた。

新西暦187年。

地球連邦政府によって統一されているはずの地球は、戦火に包まれていた。

DC戦争、そしてLS戦役。

地球圏の征服を目論む反乱勢力DC、そして人類の支配を目的に襲つてきた異星人「エアロゲイター」。

この二つの脅威に打ち勝ったことで、地球圏の戦乱は一時的に納まった。

そして東京宣言により異星人の存在が公表され、外宇宙の敵の存在が公知のものとなった。それに対抗するために、連邦政府は一致団結を訴え、地球圏防衛のための軍備増強計画「イージス計画」が推し進められた。

しかし、一見穏やかに見えるこの地球圏の平和も、所詮かりそめのものではなかった。

ヨーロッパ南部の夜空に、輸送機二台が鈍いエンジン音と立てながら高速に飛行している。

それは兵士ではなく、機動兵器 バーサルトルーパー PT若しくはAMを輸送するためのものだ。

下にある果てしない緑色の森を横切って、輸送機は加速の勢いを止めない。

そして輸送機の後部、オイルと汗の匂いが漂っている格納庫の中には、それぞれ二機のPTが片膝ついた姿勢で待機していた。

ゴーグルタイプのメインカメラと耳のようなブレードアンテナをつけている、やや円滑なフォームを持つ頭部、そしてスマートな全身スタイル。

全機がカスタマイズされているため、装備や細部装甲に違いがあるが、四機とも連邦軍が採用した次世代新型量産機「量産型ヒュッケバインMK-EE」だった。

ただ一般的な量産機のアイボリー色の塗装と違い、こっちの四機はダークグレーに塗装されており、肩に戦乙女のエンブレムと機体の番号が描かれている。

メインカメラが点滅していて機体の内部から発している低い電機

音が、機体の間に走り回って、大声で指示を飛ばしている整備班スタッフによって遮られていく。

ここには、作戦前の緊張した空気が漂っているのだ。

「バランサー調整完了、続いてT C - O S 設定開始。……新装備って、そういう所が面倒くさいよね」

肩に「02」と書かれている量産型ヒュッケバインM K - I I のコックピットの中で、連邦軍標準仕様の白いパイロットスーツを着たアジア系の黒髪青年が独り言のように呟いた。

「文句いうな、一夏。こっちに優先して回してきたヒュッケバインだ。まだリオンとかを使っている部隊の連中に聞かれたら殴られるぞ」

コックピットの側面モニターに、小さな通信画面が開かれた。左下に01の文字が書かれている画面の中には、黒いパイロットスーツを着た銀髪の青年が映っていた。

飛行機に手足をつけるという発想から誕生した機動兵器群「アーマードモジュール」。リオンはこのシリーズ最初の機種にあたる。

D C 戦争の時は主にD C 軍が使用していたが、構造が簡単で飛行機の操縦感覚と近くて、生産コストも低い理由で、今ではイスルギ重工の各工場で大量生産され、連邦軍に供給している。

しかしリオンはその飛行機と似た構造のせいで、人型を前提として開発され人間の骨格にあたる部分“フレーム”を持つ機動兵器「パーソナルトルーパー」と比べれば、耐弾性と接近戦能力が劣っているという欠陥を持っている。

D C 戦争の時リオンはその高い空中戦能力を活かして、連邦軍が採用していた陸戦と空間戦しか考慮に入れなかった量産型ゲシュペンストM K - I I を翻弄していたものの、反重力装置“テスラ・ドライブ”の小型化技術の普及により、戦闘力の優勢が奪われつつあった。

量産型ヒュッケバインMK-II。マオ・インダストリー社が量産型ゲシュペンストMK-IIに続いて、新たに開発した量産機種「テスラ・ドライブ」の標準装備化により空中戦をできるようになっている上に、高い基本スペックも持っている。今では連邦軍の各基地が配備を要望しているが、いかにせん生産能力に限界があり、各地への配備数がまだ少ないのは現状である。

「そんなこと言われても……俺はむしろ量産型ゲシュペンストMK-IIのままでよかったのに」

「ゲシュペンストでは空中戦に対応できん」

「あの重さが好きなんだよ、俺は。ヒュッケバインだともう軽くて安心感がかける。クリスは違うのか？」

操縦パネルにある数え切れないほどのスイッチを操作して機体を設定しつつ、一夏は自分がクリスと呼んだ青年と雑談を交わす。

「別に。残党ともがりオンシリーズを使ってる以上、空中戦の出来るヒュッケバインに乗り換えるのが必然だと思う。リオンなんて御免だしな。それに、どんな機体でも使いこなすのが、パイロットと言っものだろう？」

一夏に返事を返して、クリスは自分のコックピットの操縦桿を握って、指を順番に動かす。

確かに、ゲシュペンストの70t前後の重量と比べて、ヒュッケバインは40t程度しかない。格闘戦ではやや不安を感じるが、その軽さと反重力装置「テスラ・ドライブ」を生かした空中機動性こそ量産型ヒュッケバインMK-IIの売りだと、クリスは思っている。

「それは分かっているけどさ……どうせなら、特機をうちに回してくれないかな。たまには派手にやってみたいぜ」

「……お前の腕では無理だな」

愚痴を零している一夏の耳に、お馴染みの女性の呆れたような声が届いた。

特機とは、大型の敵を想定して開発した機動兵器の総称だ。18メートル前後のPTと比べて、特機は50メートル前後の高さを基準としている。装甲もパワーもPTをはるかに上回るが、操縦難しくて運用コスト高いのが最大の欠点。

「げっ、筈お前聞いてたのかよ」

「オープンチャネルだからな。それより一夏、お前に聞きたいことがあるぞ」

長い黒髪をポニーテールに纏った、凛々しい雰囲気を持つ女青年がやや不機嫌そうな顔で、隣の輸送機から一夏に通信を飛ばしてきた。

「何だよ、こんな時に」

「ブリーフィングの後、お前は隊長と二人きりで何かを話してたよな。何を話していたんだ？」

「何って、その……転属申請だよ」

「転属？ どこへ行く気だ！」

一夏の言葉を聞いた筈の顔が、一気に血相を変えた。

それだけ、離れたくないということだろう。しかし肝心の一夏の鈍さが筋金入りだから、彼女の思いに気付くことはあるまい。

「どこって、教導隊にだよ。最近活動再開したらしいけど、メンバーは三人しかいないから、メンバー募集してるんだってさ」

教導隊とは、PT用のOSである「TC-OS」のモーションパターン構築の為、縦技術に優れたパイロットを選抜し結成されたエリート集団。教導隊メンバー達が作り上げたモーションパターンの質が、前線のパイロットの生死と直結する。そのため、メンバー選抜テストの厳しさは半端じゃない。

「ハアアア〜？ 教導隊だと?! お前が入れるわけ無いだろう！」

「うつせいな！ やってみなきゃわかねえだろうが！」

「入れないに決まってる!!」

「落ち着け、篠ノ之。作戦前だぞ」

「しかし……！」

喧嘩になりそうな二人の仲裁に入ったクリスに、篤は思い詰めたような顔を見せる。

「一夏も少しは冷静になれ。どこへ行こうかは勝手だが、これからの作戦で死んだら元も子もないぞ」

「……わかったよ」

機体の調整が一段落ついて、一夏は背をシートに預けて深呼吸をする。

「……教導隊に入りたい理由は、隊長か？」

少し時間を空いた後、クリスは一夏にさっきの話題を振った。

今自分たちが身を置いている部隊「ブリュンヒルデ」の隊長・織斑千冬大尉は織斑一夏の実の姉であり、指揮官でもある。

「そうだよ。姉が教導隊に行くチャンスを潰した不出来な弟だなんて、何時までも言わせてたまるか」

「そうか。頑張れ」

「おっ、ありがとうよ。でもさ、クリスにそういうのはないのか？」

「……特にない。前線に立て、引き金を引き続ければいいと思っている」

しばらく考慮した後、クリスは返事を返した。

「おい、戦争中毒だぞ」

「別に困らない。DC残党に異星人、当分の間に戦争は続くさ」  
目を瞑って、クリスはコックピットに持ち込んだガムを口に放り込んで咀嚼する。

機体のチェックは完了した。後は作戦開始を待つのみ。それまで少し休もう。

油臭い匂い、狭くてやや硬いシート、響く機械音。ここにいる時間が一番落ち着く。

しかしそんな僅かな安らぎを完全破壊してしまう甲高い声が、クリスのコックピットに響き渡った。

「ちよつとクリスさん！ 私と一緒にオルコット家を再興させるって約束、忘れましたの？」

「……したっけ」

「しましたわよ！」

通信画面に写っている、金髪ロングの髪を先端でスパイラル状にした髪型をしている女青年がムキになってクリスを睨む。

「正直言つて、貴族名門とかあまり好印象がないんだよね……」

「そんな！！ 私のこと嫌いなの？！ 毎晩に囁いてくれた言葉は全部嘘でしたの？」

「いや、そっちは本当だ。セシリアのことは好きだ。愛している」

「そ、そうですの……でしたらいいのです」

「けっ、リア充ともめ。機体のネジを全部外すぞ」

視線を上げると、作業服を着た赤いロングヘアの青年がクリスのコックピットのハッチを叩いていた。

「弾か。こんな時にどうした」

ハッチを開けると、入り込んできた弾と呼ばれた青年はいきなり合掌して、決まりの悪い笑顔を見せた。

「実はさ、この間に借りた800Gだけどさ、まだ返せそうにな

いわ。悪いけど、もう少し待って貰えないか？」

「いいよ、別に」

「本当か……！」

「ああ。足りなくなったら、まだ言ってくれ。妹さんに窮屈な思いをさせる訳にはいかないだろう？」

「サンキュー！ 必ず返すからよ……！」

「焦ることはないよ。どうせ俺の金は、使うところがないからさ」  
淡々とそう言って、クリスの瞳に一瞬だけ寂しさが浮んだ。そしてそれを見た弾は、これ以上何も言わなくなった。

『間もなく作戦空域に到着します。各員、戦闘準備に入ってください』

突如、通信室から輸送機二台の格納庫へ飛んできた指示が、空気を一変させる。整備員がさらに早足になり退避を始め、パイロット四人がコックピットハッチを閉じてエンジンに火を入れた。

「敵部隊と接触まで300秒。現時点の情報を整理する」

四人のコックピットメインモニターに、厳しい表情をしている軍服姿の黒髪女性の顔を映った。

地球連邦軍情報部に直属する特殊任務実行部隊「ブリュンヒルデ」の指揮官、織斑千冬大尉だった。

「今回の作戦目的はブリーフィングで言った通り、DC残党によって奪われた重要物資の奪還である」

千冬の説明と同時に、メインモニターに敵部隊の情報が並び出される。

「重要物資が搭載されていると思われる輸送機を中心に、敵はアイマードモジュール部隊を展開している。現在確認したのはリオンタイプ8機、ガリオンタイプ2機」

「残党如きが、随分と奮発したものだ」

表示されている情報に目を通してながら、クリスは言い捨てるように呟く。

軍事勢力として既に崩壊したDCの残党では残存機動兵器の数が限られているし、補給源も連邦に押さえられてちゃんとしたメンテナンスを受けるチャンスが少ない。

なのに一気に十機のAMを投入してきた。

それだけ重要な作戦なのか、それとも戦力に余裕があるのか。

「いずれにせよ、向ってくるなら排除するまでだな」

さつき一夏と喧嘩した時と違い、今の篠ノ之箒は至って冷静な口調になっている。この雰囲気は、冷酷な兵士のものだった。

黙って聞いているセシリアと一夏も、今は同じ表情になっている。

「物資を奪還すれば全滅させる必要はないが、状況的に難しいだろう。速やかに敵を排除し、重要物資のコンテナを確保せよ」

「了解」

間もなく、四人は殺し合いの戦場に飛び込む。だが心を乱すものは、一人もいない。

クリス、一夏、箒、セシリア。いずれもしら戦役から戦い抜いてきた歴戦の兵士。ホワイトスターでの修羅場と比べれば、DC残党相手なんて生ぬるい。

「なお、今回のフォーメーションだが、鈴が不在のため、クレマンはバックアップに回れ。現地での指揮も任せるぞ」

「了解」

凰鈴音。部隊の五番目隊員だが、量産型ヒュッケバインMK-Iのカスタマイズ化が間に合わなかったため、近くの基地で技術顧問と留守番している。

「では出撃だ。くれぐれも重要物資の確保と、生還を最優先にしてくれ」

「……了解」……

メインモニターから千冬の姿が消え、輸送機後部のハッチが低い音を立てて開いていく。外から吹き込んできた強い気流を感じたのと同時に、クリスはヘルメットを被って、操縦桿を握り締めた。

丁寧に操作で機体をしゃがんだまま後ろへ移動して、ウェポンハンカーへ手を伸ばす。

フォトンライフルをリアスカートアーマーにマウントして、レクタングル・ランチャーを握った後、クリスは肩に01と書かれた、自分専用にカスタマイズ化された量産型ヒュッケバインMK-IIの背後に取り付いているバーニアユニットを展開させる。

標準仕様の量産型ヒュッケバインMK-IIだと、テストドライブの体積が小さくて、わざと展開する必要は無いが、クリスの機体は特注品のバーニアユニットに換装されている。

高機動性を活かして敵陣をかく乱する切り込み役がクリスの本来のポジションだが、今回ではバックアップの人手が足りないため、やむなく後衛に回された。

「ノートウング01、クリストフ・クレマン、出る！」

淡々とした口調で、クリスは自分の出撃を告げ、ダーククレアの機体を夜空へ飛び立たせた。

一方、DC残党の輸送機の格納庫では、小柄の銀髪女性一人が静かに佇んでいた。左目に眼帯をつけている彼女は、一機のAMを見上げている。

DC戦争の中期から大量生産されていたリオンシリーズの指揮官

用上級機体であり、完全に人型をしているガーリオンだった。

そのガーリオンの塗装はDC戦争の時、黒き竜巻と呼ばれる勇将・エルザム・V・ブランシュタインが使っていた機体と同じ、黒と赤のツートンカラーに塗装されているが、全体から見れば全く違う機体だ。

背部に固定されて機体正面へ向けている大型レールカノン、太ももの側面に増設された大きなサイドアーマー。両腕の前腕部装甲にはマシンキャノンが固定されており、マニピュレーター、つまり人の手に当たる部分はかつてとある人物が搭乗したガーリオンのカスタム機と同様の撃発型貫手に換装されている。

これらの改造により、機体の攻撃パターンが大きく変わるのは必然。癖の強そうなこの機体のパイロットは、技量の高い人間と見て間違いないだろう。

この部隊はまだ連邦の追撃を受けている最中。他の搭載機体は全部出撃中だが、この機体だけがここで静かに陣座しているのは、指揮官の体力を温存するためでしょう。

――！

突如、格納庫に警報音が響き渡る。

『こちらへ接近中の敵部隊発見！！ 数4、 距離6500！！ 間もなく接触します！！』

スピーカーからオペレータの状況報告が聞こえる。早足で壁に設置されている通信機を手に取り、銀髪の女性は外に居る部隊の指揮を執っている副官への通信回路を開く。

「私だ、クラリッサ」

「ラウラ隊長、ご指示を」

「敵の目的は恐らくコンテナの奪取、輸送機に近づけさせずに足

止めしろ。私も直ぐに出るから、それまで持たせろ」

「はい。ですが相手はただの四機、こっちの数の半分以下です。レーゲンの予備パーツも残り少ない以上、ラウラ隊長は温存すべきかと」

通信機の向こうから、クラリッサと呼ばれた副官が上官に戦力温存を進言した。

「……わかった。が、無様な姿を晒すなよ？」

ラウラと呼ばれた少女は自分の部下を信頼している。しかし今回強奪したコンテナが連邦軍にとっての重要性を考えると、来る敵はかなりの手慣れと見るべきだろう。

「はい……！」

クラリッサの返事を聞こえた後、ラウラは通信機を壁に戻して自分の愛機のコックピットに乗り込んだ。

「安心しろ。お前は、せめてお前だけは必ず私が……！！！」

格納庫の中央に入っている小さなコンテナに決意満ちた視線を向けてそう呟きながら、ラウラは機体の起動シーケンスを始めた。

夜空の下、ダークグレーの量産型ヒュッケバインMK-II四機が、安定したスピードでフォーメーションを維持したまま疾翔する。前方のフォワードポジションに居るのは、接近戦仕様にカスタマイズされた一夏機と箒機。

胴体、肩そして足に追加装甲とバーニアを増設され、胸元にバルガン砲二門が固定されている二人の機体は一般機より防御力と運動性が優れている。さらに追加装甲の裏には、大量の接近戦用武装が内蔵されているため、格闘戦においては高い戦闘力を発揮する。

そして後のバックアップポジションに居るのは、高機動戦用のク

リス機と狙撃戦用のセシリア機。

クリスの機体ではパイロットの癖に合わせて各部にバーニアを増設され、背部のバックパックが高性能のスーパーバーニアユニットに換装されているため機体の反応はかなり敏感になっているが、無茶苦茶な機動を大好物とするクリスは至って満足している。

そしてセシリアの機体では、高性能カメラユニット付きタイプの頭部に加えて、機体の肩にも高感度センサーを追加されている。専用武器の超長距離狙撃ライフルと相俟って、ワンオフ機にも引きを取らないトップクラスの狙撃能力を誇る。

「ノートウング04より各機へ、敵にキャッチされましたわ。リオン部隊がこっちに向かってきました」

一番探知性能の高いセシリアは、リーダー画面にある敵マークの動向に変化があったことを皆に知らせる。

「ノートウング01より各機へ、フォーメーションを維持しつつ速やかに敵部隊を殲滅せよ。輸送機への侵入も考えると、あまり時間をかけられん。注意しろ」

現場の指揮権を預かっているクリスは、最初の指示を出す。

「……今回は鈴がない、あまり調子に乗って突っ込み過ぎるなよ、フォワードの二人」

「了解!!」

返事をしたのと同時に一夏と箒は加速を始め、セシリアは機体の額にある高性能照準カメラを起動して、超長距離狙撃ライフルを構えた。

「まずは一機、頂きますわ!!」

照準の真ん中に入った飛行機に似た外形を持つ青いAM、リオン・タイプFに向かって、セシリアは引き金を引いた。

機体の背中にある専用ジェネレータとケーブルで繋いでいるその20メートル前後の長さを持つライフルは、リオンの倍以上の射程距離を持つ。この距離から撃つてくるとは思いも寄らなかった敵は一直線に飛んでくる熱線によって貫かれ、この戦いの最初の花火を上げた。

そして予想外の事態にうろたええることなく、敵は直ぐに陣形を散開した。

「逃がしませんわよ!!」

高出力のジェネレータのお陰で、ライフルのエネルギーチャージはすぐに完了した。もう一度ライフルを構えて、セシリアは次のターゲットを定め始めた。

「ふっ、さすがだな」

活躍した恋人に感心の声を上げたクリスは、レクタングル・ランチャーを機体正面に構えて前進した。

この距離で攻撃できるのは、セシリアしかない。まずは自分の射程距離まで移動しないと、援護射撃は出来ない。

「はぁあああ!!」

先行した一夏は、既に敵部隊の先頭に立っているリオンと交戦に入った。一気ブースターを噴かして、肩部装甲でタックルして敵のバランスを崩した所で、サイトアーマーにマウントされているビームザンバーを手を取った。

野太刀の外見をしているビームザンバーの威力は、ビームソートなどの比ではない。長時間の使用は難しいが、その凄まじい破壊力は、アンチビームコーティングされた装甲すら難なく両断できる。

「DC戦争は、もうとつくに終わったんだよ!!」

叫びながら、一夏は光の刀身で一文字を書いた。さくつとした手

応えで、相手は腰部から両断された。

上半身と下半身に分かれたリオンが、それぞれ爆発して光を上げる。

「出てくるから！……つてうわあああ！！」

台詞の途中にロックされた警告音を聞いて、両断されたリオンが爆炎を上げたのと同時に一夏は慌てて高度を上げて旋回する。

急加速によるGが体に襲い掛かり、一瞬肋骨に激痛が走る。一夏はそれを歯を食いしばって耐えながら操縦桿を切って、背後から撃つてくるレールガンの銃弾を避けた後、機体姿勢を調整しつつ左手のM950マシンガンを動かして敵に照準を合わせる。

クリス機の機動が体にかけるGと比べれば生温いものだ。これくらいも御しきれないようでは、教導隊に入るなど夢のまだ夢。

「一夏っ！！」

そこでフォワード要員のもう一人、篠ノ之が呐喊する。

腕部に増設した装甲でメインカメラとコックピットを庇って突進しながら、彼女は手に握っているビームソードを振り下ろしたが、相手のリオンはそれを機体姿勢を横へ傾けることで避けた後、腕部レールガンを真っ直ぐに向けてきた。

しかし、接近戦に持ち込まれた時点で、このリオンの運命は決まった。

「甘い！！」

叫びと同時に、箒機の胸部バルガンが唸りを上げる。そこから噴出された60mm徹甲弾を回避しようとするリオンに、箒はバーニアを噴かして、リオンの長い両腕部の真ん中に飛び込んで、相手の胸元の突起部に脚裏を叩き込んだ。

そこから迸ったのは、装甲板が切り裂かれた時に発生した火花。歪みながら破られて行く機械が悲鳴を上げながら、オイルが返り血

のように噴出される。

箒機と一夏機の接近戦仕様の脚裏には、回転ノコギリが仕込まれていた。高速に回転する鋼の牙も触れられたものは、千切られていくしかない。

無論、このリオンも例外ではない。エンジン部の直撃ではないものの、そこにあるのはコックピット。パイロット諸共切り裂かれたリオンは、そのまま爆発せずに地面へ落ちていく。

同時に、箒の背後に回り込んだもう一機のリオンがレクタングル・ランチャーの砲弾に直撃して、凹んだ装甲板に風穴を開けられて炸裂した。

少し後方に居る、クリスからの支援射撃だった。

「あまり熱くなるな、ノートウング03。装甲を過信して直撃されたらシャレにならんぞ」

「済まない。一夏も無事だな？」

「平気だ、さっさと片付けよう。……敵指揮官殿のお出ました」

レーダーに注目すると、確かに一夏の言うとおり、リオン部隊の半分をあっと言う間にで半減した敵に脅威を感じた敵のガーリオンは動き出した。

敵残存リオン四機、ガーリオン二機。

「狙い撃ち、ですわー!!」

後ろの上空から白い光が降り注いだ、脳天からぶち抜かれた一機のリオンが煙を上げて、セシリアが今日における二つの撃墜マークになった。

これでリオンの残存数は、三機になった。

「……」

後方の輸送機操縦室で、千冬はメインモニターに映っている戦況に目を細めつつ、眉の間にしわを寄せる。

状況は至って順調と言えるのだろう。だが、千冬が考慮している問題は、そこではない。

この部隊を率いる立場に立たされた以来、胡散臭くない任務を引き受けた経験がない。

だが今回はいつもよりさらに臭く感じる。普段は勤務室で優雅に盆栽を嗜んでる年寄りの上官ですら、今回の指令書を渡すときには深刻な顔で何回も注意した。

必ず奪還しろ。そして中身を見るな。

こっちは機体改修中の隊員がいるのに。

そこまで思うと、ふっと思いついたことがある。

最近では情報部の上の連中が、L5戦役の時連邦軍に居たエアロゲイターのスパイが残した研究資料を掘り出したって噂を耳にした。

……関連性があるのだろうか。

いや、さすがに考えすぎだろう。

「……ふんっ」

自分を嘲笑うように鼻を鳴らして、千冬は横の椅子に腰をかけた。

視線を戦場に戻すと、数の劣勢は既に逆転された。

リオンタイプは既に全滅され、残りのガーリオン二機をそれぞれ一夏と箒が相手をしている。

「チッ、さすがは指揮官機、手強いぜ!!」

「このままでは、コンテナを積んだ輸送機が!!」

信じ難いことに、二機のガーリオンはスペックが上のはずの量産型ヒュッケバインMK-II四機と互角に戦っている。

相手はかなりの手慣れのような。さっきのリオン達と動きがまったく違う。射撃が簡単に回避され、格闘しようにも近づけない。

「ちつ、時間が……!!」

ガーリオンと交戦開始からもう10分以上立っている。これ以上グズグズしたら、奪還目標に逃げられてしまう。

「ノートウング01より各機へ。今から輸送機にへ強行する。ノートウング02、03は敵を足止めをし、04は俺の援護をしろ」  
もはや迷っている時間がない。強行突破を決めたクリスは隊員に指示を出した後、操縦桿を一気に前へ押し出した。

「ブースト!……くうつ!!」

刹那、背部のテストドライブが中央へ集中して、全てのスラストーが一斉に火を噴いた。操縦桿を握っている手を震えを必死に押さえて、クリスは前へ押し出された機体の姿勢を安定させる。

「行かせん!!」

「余所見するな!!」

クリスの意図を気付いたガーリオン一機はバーストレールガンを向けるが、引き金を引く前に一夏のからの斬撃が来た。慌ててアサルトブレードで受け止めようとするが、高出力のビームザンバーと衝突して一瞬で溶断された。

「貰ったぞ!!」

「しまった!!」

アサルトブレードが完全に破壊される前になんとか斬撃の軌道を逸らしたものの、左肩部の金属粒子貯蓄ユニットが切られて破損した。

これで、ガーリオンの最大攻撃手段、「ソニック・ブレイカー」が使用不能になった。

「貴様……!!」

敵のガーリオンから、激怒した女の声を一夏は聞こえた。

「よしっ、追いついた……!!」

輸送機はもう目の前。既に弾切れしたレクタングル・ランチャーを捨てて、クリスはビームソードを握って、光の刀身を形成させる。敵が後部ハッチを大人しく開けてくれる訳がない。多少手荒な手段を使って、自力でハッチを開けるしかないだろう。

左腕部を前へ掲げて、掌内からワイヤーアンカーを輸送機に向けて射出する。十分な固定強度を確認した後、一気に接近して輸送機の外壁と接触した。

ビームソードの持ち手を反転させて、刀身を後部ハッチの辺縁部に向ける。装甲板はそこそ厚い、早く作業を始めないと戦友たちと離れてしまう。

しかしその前に、輸送機のハッチは勝手に動き始めた。

「……っ!？」

向こうに敵が居ると分かっているのにわざとハッチを開ける可能性はたった一つ。それを気付いたクリスは直ぐ外壁を蹴ってハッチの周辺から離れた。

トオオオン!!

直後、巨大な発砲音と共についさっきまでクリスが居た位置に大口径砲弾が薙いで行った。

「やはりか……」

予想とおり、敵にはまだ切り札を温存していた。開放された輸送機の後部ハッチから、もう一機のガーリオンが現れた。

「しかもカスタム機とは……随分とリッチな残党だな」

黒と赤のツートンカラーに塗装されて、改造された特殊仕様ガーリオンだった。右肩の大型レールカノン砲身の奥はまだ僅かに光っているように見えて、ガーリオンは首を動かしてクリスを睨むよう

に、センサーを光らせて威嚇した。  
そしてその機体の背後には資料に描かれていた、連邦軍マークの  
ついたコンテナ見えた。

こっちは新兵じゃあるまいし、威嚇くらいで動揺はしない。

威嚇が無駄だと理解した黒いガリオンは、無言に輸送機の格納  
庫の地面を蹴って、空中へ飛び出してクリスに向ってきた。それに  
対してクリスは迷わずフォトンライフルの銃口を向けて、

「ラスボスって訳か……来い!!」  
引き金を引いた。

機体を回転させてビーム弾丸を回避した後、黒いガリオンはサ  
イドアーマーから複数のワイヤーを飛ばしてきて、鈍い金属光を発  
しているワイヤーの先端部分が刺してくる。機体を加速させてそれ  
を回避した後、クリスはもう一度相手に照準を合わせるが、モニタ  
ーに映ったのは目の前まで迫ってきた敵の姿だった。

「……っ!!」

腕を振り上げて、黒いガリオンのその物理打撃武器と化された  
撃発型貫手がクリスのコックピットを狙って真っ直ぐに突いてくる。

「なっ!!」

相手が振り出してくる貫手を慌ててライフルで防御すると、マガ  
ジンへの直撃によってライフルが爆発して、それを機にクリスは一  
旦距離を取る。

「ちっ、本物の黒き竜巻よりやばそうだな!」

手元に残ったライフルのグリップを捨てて、クリスは再びビーム  
ソードを握って相手を対峙する。さっきの貫手の一撃はライフルの  
お蔭でコックピット部への直撃を何とか免れたが、腹部がダメージ  
を負った。外部装甲板が剥がされ、晒された内部の機械が電光と火  
花を散らす。

「まずいな……」

機動性なら負ける気がしないが、火力の差が大きい。何より時間がもつない。

コンテナは目の前、何とか奪って逃げるか？　だが、ラスボスに背を向けるのは自殺行為だ。

結局、黒いガーリオンを排除しない限り任務は完成できない。

「なら……!!」

ビームソードの刀身を前へ突き出して、クリスは突貫する。そして黒いガーリオンもそれを応じるように正面から向ってくる。

「はあああつ!!!!」

間合いに入った敵へ、灼熱のビーム束を突き出す。

相手の格闘武装は貫手。リーチの長さではクリスの方が勝っている。

しかし、黒いガーリオンのパイロットの反応速度の早さは尋常じゃない。ビームソードがその艶々とした黒いボディに届く直前に僅かに横へ移動して攻撃を避けた後、右貫手を突き出してくる。

「……っ!!」

咄嗟に操縦桿を引き、胸部のバーニアを吹かして急後退で致命的な一撃をかわす。そしてもう一度ビームソードを横薙ぎに振って切りかかるが、黒いガーリオンは上半身を後ろへ倒して、バック転と同時に量産型ヒュッケバインMK-IIの胴体部に蹴りを放った。

「うわあつ!!」

重い蹴りの衝撃が全体全身に響き渡り、コックピットの中でパイロットスーツを着たクリスの脳まで襲う。

ガーリオンはリオンシリーズの高級機であるため、構造は甲殻類と似て、内部機械を装甲板で包んでるだけ。そのせいで、格闘戦では関節の負担が一番重くて、物理打撃にそこまでの威力を出せないはず。

だがこの黒いガーリオン、量産型ヒュッケバインMK-II以上

のパワーを出している。質の高い予備パーツを使ってる上に消耗が激しくて運用コストが極端に高いか、もしくはガーリオンの皮を被った別物か。

今はどうでもいい話だ。

吐き気を我慢してペダルを踏み、クリスは操縦桿を横に倒して空中回転して体勢を整えながら回避行動を取る。

飛んでくるレールカノンの砲弾が空を切り、地面に直撃して土と樹を吹き飛ばす。

「乱暴なやつだな!!」

量産型ヒュッケバインMK-IIに残った射撃武器はもう頭部バルガンしかないので、距離を取られるとやり辛くてかなわん。

だが、敵との距離を自在に調整できるのが、この高機動仕様の量産型ヒュッケバインMK-IIの強みだ。

ゆっくりと弧線を描き、機体正面を敵に向ける。正面からのレールカノン砲弾を回転で弾道から機体を逸らす。

そして、クリスはもう一度操縦桿を一気に押し出した。

「このヒュッケバインならできるはずだ……」

スラストから噴出した青い火炎がダーククレアの巨人を閃光へ換え、体に襲い掛かるGがクリスをシートへ押さえつける。

「レールカノンの砲撃を潜り抜いて、敵を叩ける!!」

僅かの瞬きで、クリスは黒いガーリオンの距離を詰める。懷に飛び込めば、砲身の長いレールカノンは使えない。

だがさすがと言うべきか、黒いガーリオンのパイロットはうろたえることなく、貫手を構える。目の前に飛び込んできたら必殺の一撃を見舞うつもりだろう。

「うおおっ!!」

しかしクリスは減速もせず、左腕で胸部を庇うように構えてこのまま突っ込んでいく。

黒いガーリオンはまるで勝利を確信したように、クリスと接触する瞬間に真っ直ぐに貫手を振り出した。

「くっ！！」

ガードに使った左前腕が、一瞬でバラバラに叩き潰された。体勢を僅かに倒して胴体への直撃を逸らしながら、クリスは機体の膝を突き上げる。

「さっきのお返しだ！！」

膝蹴りでガーリオンの胴体部に衝撃を与える。ガーリオンの機体重量が軽くて、装甲も硬い方ではない、この一撃はパイロットにもダメージが届いたはず。

そしてこの一瞬について、クリスは敵と密着した状態でもう一度バーニアを全開にした。

咆哮するバーニアのパワーでそのままガーリオンを盾にして、輸送機の後部格納部へ突入した。

ドカーン！！

急加速した70t以上の鉄塊をぶつけられた輸送機は激しく揺れ、格納庫の装甲壁が大きく凹む。整備用の機械が倒れて、備品箱に入ってた消耗品のパーツや弾薬などが格納庫の地面にぶちまかれる。

自動作動したコックピットのエアバッグに構う暇もなく、クリスはコールドメタルナイフを逆手に振り上げて、自分の下敷きになっている黒いガーリオンに止めを刺す。

「終わりだ！！」

ガーリオンの胸元の突起、コックピット部に、クリスは思いっきりナイフを刺し込んだ。体を動かす心臓部が潰され、まるで人間が苦しんでいるように一瞬もがいた後、ガーリオンのセンサーから光が消えた。

ここは格納庫の中。下手に攻撃して機体を爆発させたら、回収目

標まで吹っ飛ばされるかもしれない。ビームソードからナイフへ切り替えたのもそれが原因である。

目を黒いガリオンから離さないまま、クリスはゆっくり後退して、残った右腕で重要物資のコンテナを抱き上げた。

軽い。大きさはヒュッケバインの頭部ユニットとほぼ同じ。だが中身には興味ない。

好奇心を自制できない人間は早死する、という上官の言葉を忘れるわけにはいかない。

コンテナを脇に抱いて、クリスは敵の輸送機から飛び出した。

「ノートウング01より各機へ。ターゲットは回収した、直ちに撤収せよ。ポイントα115にて合流する」

輸送機から一定距離を離れた後、クリスは味方に指示を出した。

「こちらノートウング02、わかった」

「ノートウング03、了解だ」

「ノートウング04、了解しましたわ」

返してきた隊員たちの返事が、全員の無事を証明した。それを確認したクリスは安堵の表情を浮べて、ペダルを踏んでいる足に僅かな力を加えた。

月の下で、暗い灰色のクラスが甲高い声を上げ夜空を横切って、闇の向こうへ消えた。

三日後、朝十時。

地球連邦南欧方面軍支部・アビアノ基地の滑走路に、一台の飛行機が着陸した。飛行機が完全に停止した後ハッチが開き、中から白衣を着た数人が降りてくる。

階段を降りている途中に、先頭に立っているメガネをかけた四十代女性が手を振って、地面で自分たちを迎える軍人に得意げな笑みを見せた。

「よつ、まだ会ったな……ダNST司令」

「……っ」

軽く頷いて、地面に居る軍人は渋い顔のまま唇を閉じて沈黙する。全員が降りた後ダNSTと呼ばれた軍人は無言に歩き始め、白衣達と共に輸送車に乗り込む。

エンジンの震動と共に、輸送車が走り出す。滑走路を後にして、基地の奥へ進む。

基地中央の倉庫地帯を通る時、倉庫の奥に佇んでいる鋼の巨人達の姿が視界に飛び込んだ。

青くてウサギ耳状のブレードアンテナを持つパーソナルトルーパー「量産型ゲシュペNST MK-II」。

飛行機に手をついたような姿を持つ空中戦アーマードモジュール「リオン」。

そして、連邦軍が正式に採用した最新型量産機「量産型ヒュッケバイン MK-II」。

「あれ？」

メガネ女の顔に、意外そうな表情が浮ぶ。

倉庫の奥に並んでいる五機のダークグレー色の量産型ヒュッケバイン MK-II の姿は、彼女の記憶にある一般機の形とは違うものだった。

「やるね……生産量がまだ少ないのに、もうカスタマイズかい？」

「あの部隊は情報部直属だ。俺の管轄範囲ではない」

「ほう……」

ダンストの返事を聞いたメガネ女はその丸いメガネを押し上げて、遠くに立っている量産型ヒュッケバインMK-IEIに興味深そうな視線を投げる。

「ついでに言うが、例の物を奪還したのもあの部隊だ」

「それは……益々興味深いな。後で資料を回してはくれないか？」

「……それは情報部と交渉してくれ。こっちにも詳細な資料を持つてない」

「そうか」

残念そうな声で、メガネ女はポケットからキャンディを出して、舐め始めた。

十分程移動した後、輸送車は白いビルの前で止まった。白衣達は車から降り、ビルに入り込む。

ロビーを横切ってエレベータに乗りこみ、「F15」のボタンを押して上の階を目指す。エレベータのドアが再び開いたとき、目の前にあるのは、銃を持っている兵士によって封鎖されている研究室だった。

ポケットから認証カードを出して、ダンストはロックを解除した。僅かな摩擦音を立てた後開かれた分厚いドアを潜り抜けて、白衣達が入室する。

研究室の真ん中には、人間用の冷凍睡眠カプセル一つが陣座していた。横まで歩いてメガネ女はカプセルを見下ろして、狂気じみた表情を浮かべて陰険に笑った。

「さて、目覚めの時間だ……お姫様」

カプセルのガラス越しに見えるのは、安らかに眠っている15歳前後の金髪少女の姿だった。



## Chapter - 01 戦（後書き）

ISキャラがこつちでは全部20歳。なぜ一人だけ15歳なのか、それは今後の展開で明かされます。

各機のカスタマイズモチーフを挙げると、クリス機はトールギス、一夏機と箒機はクロスボーンX1とX3、セシリアはザク？・スナイパータイプ。

鈴は……スラッシュザクファントムか、ヘビーアームズにしたい。あと、ビームザンバーって書いているけど、イメージしたのはアヘッド・サキガケの剣です。

もちろん、意見は募集してます。

因みにラウラはちっこいから刺されてません。

## Chapter - 02 甘

夢を、見ていた。

夢を、絶え間なく見続けていた。

そして今この瞬間も、夢を見ている。

とても悲しくて寂しい、別れの夢だった。

夢の中で、銀色の髪をしている少年は私を見て頼もしく笑った。

大丈夫だ、おばさんのことは任せろ、と頭を優しく撫でてくれた。

その手の温かさを一秒でも永く感じていたくて、私は地面を見つめたまま、足が動けない。

黄色の向日葵畑に囲まれた田舎道の真ん中に止まっている黒い高級車の側に立っている黒服の人が、私を催促した。

じゃ、行つてらっしゃい

そう言つて、少年は私の頭から手を退けて、別れの言葉を告げた。別れたくない。

一瞬、涙が出そうになった私は、無意識に彼の服を掴んだ。

すると、困ったような表情を浮かべつつも、少年は私を抱きしめた。

いつも心地よく感じていた、体を包んでくれるこの温もりは、こんなに切なくて、安心させてくれた。

直ぐ迎いにいくから、待っている。

耳元に響いた少年の言葉に、私は小さく頷いたのだった。

——約束だよ、破ったら、一生恨んでやるんだから。

北アフリカ。

真っ赤な太陽が沈んで行く荒野の空に、一台の輸送機が飛行している。

つい先日の奪還作戦にて甚大な被害を受けたラウラ・ボーデヴィッヒ少佐の部隊の輸送機だった。

「AMの半数以上が撃破された上に、物資まで奪われたとは。失態だな、ラウラ少佐」

「申し訳ありませんでした、バン大佐」

通信室の中、モニターに映っている五十歳前後の男性軍人に向かって、銀髪の小柄女性は何びきを入れた。

先日の作戦でガーリオン二機は小破で済んだが、リオン八機は全滅した。ラウラは小柄な体格のお陰で何とか刺されずが、専用のガーリオンもコックピットブロックと装甲が酷く破損した。

そして何より問題なのは、作戦目標のコンテナが奪取された。

作戦は完全に失敗した。指揮官として、責任を取らねばならない。

「貴様を信頼してこの作戦を許可して、貴重なAMを与えたのだぞ。報告によれば、相手はただのPT四機ではないか」

「弁解はしません。いかなる処分も受け入れる覚悟は出来ております」

「ふん、いいだろう。しかし今はそれ所じゃない。貴様は一旦ア

ースグレイドルへ向かい、あそこで大人しくしている」

「アースクレイドル?!」

バン大佐の命令を聞いたラウラは、僅かに驚いた。

アースクレイドルとは、宇宙規模の脅威に対して、人類と言う種族を地下冬眠施設にて生き延ばせようとする計画「プロジェクト・アーク」の一環として建設された、大型地下冬眠施設である。

あの施設はDC戦争の時期において、DCの拠点として使われていたが、今では中立的の立場にあるはずだ。

「あそこの責任者が我らを受け入れたいと申し出てきたのでな、今では既に我らが再起の拠点になり、各地の同志があそこへ集いつつある。貴様もそこへ向かえ、いいな?」

「了解しました」

「では、以上だ」

「はっ!」

一礼した後、モニターから男の姿が消えた。

下ろした手を拳に握り締め、ラウラは地面を見つめて唇を噛み締めた。

「……必ず救い出す。待っていてくれ!」

その右目には無力の自分への悔しさと、静かなる決意が滲み出ていた。

深夜九時半、アビアノ基地全体は静けさの中にあった。

照明の光が深い夜空にあふれ出し、当番の兵士があくびしながら歩き回る。

また灯っている格納庫の隅に一般兵士と整備兵達がギャンブルと言つ名の娯楽を興じている声が響いている。

今は兵士たちが一日の疲れとストレスを発散する時間だ。

仕官寮の廊下を、長い髪をツインテールに結い上げた小柄のアジア女性が通って行く。

地球連邦軍情報部直属の特殊任務実行部隊「ブリュンヒルデ」所属、凰鈴音少尉だった。ステンレス製の弁当箱を大事そうに抱えて、彼女は足運びを早めていく。

階段を上げて、突き当たりの部屋の前に立ち止った彼女は、アルミ製のドアを叩いた。

「一夏、いる？」

「鈴か。開いている。勝手に入って来いよ」

「うん！」

ドアの向こうから響いた部屋の主の声を聞こえて、彼女はドアノブに手をかけた。

「こんな時間に何か用事？」

部屋の中でパソコンと向き合っていた黒髪の青年が入室してくる鈴を見て、作業中の手を止めた。

「ちょっとね、食堂の厨房を借りて夜食を作りすぎちゃったから、一夏も腹が減ってないかなって思っ。感謝してよね」

そう言いながら部屋の中に入ってきた鈴は弁当箱を開けて、中にいっぱい詰め込まれたオレンジ色の肉料理を一夏に見せた。

同時に、部屋の中に特有の酸っぱい匂いが漂った。

「おお、美味しそうじゃん」

「えへへ、今回はちょっと自信があったからね。はい、お箸」「サンキューな」

鈴から箸と弁当箱を受け取って、一夏はまだ熱々の酢豚を口の中

に送る。

咀嚼している一夏をみて、彼の反応を待つ鈴は唾を飲み込む。

「うん、美味しいよ!!」

「そ、そう？ まっ、当たり前なのよね」

一夏の賞賛の言葉を聞いた途端、鈴は緊張しきった表情が一瞬で柔くなり、赤く染まっあ顔を逸らして部屋中に視線を巡らせて、最後はパソコンのディスプレイに目を留めた。

「あんた、報告書まだなの？ もうこんな時間だよ？」

「ちがうちがう。TC・OSのモーションパターンを作ってるんだよ」

酢豚を頬張りながら、一夏はそう返事した。

「モーションパターン？ 何でだよ」

「教導隊のキタムラ少佐に見てもらったためだ。俺達の部隊は特定の基地に長期滞在することが少ないから、こうするしかないのさ」

今の教導隊は少ないメンバーでモーションパターンを更新しながら、各地の基地に訪ねて入隊希望のパイロットをテストする。各地転々とすることが多い「ブリュンヒルデ」では、こうして自分が作ったモーションパターンを送って存在をアピールするしかない。

丁度前回の作戦から、このアビアノ基地にはすでに一周間ほど滞在している。せっかくの暇なので、一夏はモーションパターンを築き始めた。

「そんなに教導隊に入りたい？」

「ああ、絶対入ってやる」

「でもあそこに入ったら、あたしと、あたし達と会えなくなるよ？ 一夏は寂しくないの？」

「寂しいに決まってるさ。でもだからって、オレは諦めたくない」  
思い人と離れたくない鈴の気持ちを、一夏はあくまで友人として  
捉えていた。

顔を曇らせた鈴の落胆を気付かずに箸の動きを速めて酢豚を全部  
食べ切ると、一夏は席から立った。

「酢豚はありがとうな。弁当箱は洗ったら返すよ」

「別にいいよ。そのまま返してくれても」

「これくらいさせろって。じゃ、ちよつとクリスの部屋に行つて、  
モーシヨンパターンの意見を聞いてくるから、お前はどつする？」

「えっ、クリスの部屋？ 止めなさいよ。絶対セシリアが居るか  
ら」

「ああ……じゃ、明日にするしかないか」

セシリアがクリスの部屋に居るなら、さすがに入る勇氣はない。  
肩を深く落として、一夏は再び座り込んだ。

「というか、どうしてアタシに聞かないのさ」

「いや、鈴のTC・OS設定いつも無茶苦茶だし、よく今まで生  
き残れたなつて思ってるし。異能生存体じゃないか？」

「何だと……!?」

「うぐっ!!」

ベッドにある枕を掴んで、鈴は思いっきり一夏の顔へ投げ付けた  
のだった。

一方、向こうの部屋では、あかりが消えていた。

薄暗くて静かな部屋の中、ベッドが揺れる音と甘い喘ぎ声だけが  
小さく響く。

四角に切り取られた淡い月光に照らされ、絡み合う雪のような白  
い肢体に青年が指を這わせ、下にいる女性は敏感に声を上げながら、

シーツを握り締めて体中に奔る快樂の衝撃に身悶える。

「やっぱセシリアって、ベッドの上に居る時が一番可愛いよね」

「はぁ……はぁ……もう……変なことを……言わないでください……」

「こんな敏感になってるなんて。いやはや、手を繋いだけで気絶してしまうあの頃のセシリアはどこに行ったのやら」

「ぜん、部……クリスさんのせい……うっ……ではありませんか……！」

荒い呼吸の合間に片言のような返事を返しながら、セシリアは愉悅の海に溺れぬように目を瞑って、必死な表情で唇を噛み締める。そんな頑張ってる彼女の姿を、クリスは堪らなく愛おしく思った。一旦責めを止め、彼女の額に薄く浮いた汗を手で拭いた後、かかった髪を掻き分けてセシリアの頬と耳にキスをした。

「はぁ……はぁ……クリスさん？」

焦点の合わない潤った目から蕩けたような視線を送ってきたが、薄く開いた唇から甘い息と共にセシリアが呟いた小さな声を聞こえたクリスは、彼女の耳元で囁く。

「愛しているよ、セシリア……っくうっ！！」

繋がっている体の芯から、セシリアの純粋な嬉しさがダイレクトに伝わってくる。

危うくカウンターを喰らうところだった。眉を顰めて何とか体の共鳴を耐え抜き、クリスは口元を吊り上げてわざと怒ったような表情をして、顔が真っ赤なセシリアを睨んだ。

たったの一言でここまで悦んでくれてるのが。本当、可愛いやつめ。

「不意打ちとは、卑怯なり」

「だって〜！ クリスさんがいきなりあんなことを言いますから〜！」

「問答無用だな。アタッカー&リベンジを同時発動したお仕置きだ、覚悟しろよ？」

「ええええっ〜！」

セシリアの耳元に口を近づけて懲罰宣言しながら、クリスは手を彼女の太ももの側面に添えて、ゆっくりと撫で回す。体から力が完全に抜けている彼女に、抗う術がない。

そもそもよく見ると、見つめてくるその切なそうな瞳の奥には、情欲の炎が揺らめいていた。

このDMっ子め。抵抗ところか、超期待をしているな？

「よし、ならツイン精神コメント『連撃』！！ SPが尽きるまで落とし続けるぞ！！ 因みに俺はSPアップLv9だからな！」

「そんな使い方、絶対間違ってますわよ！ ちょ、い、いきなりそんな、激しいすぎますわ〜！！」

穏やかだった風が一瞬で暴風へと変わり、女として男に求められる悦びの激流が神経末端を衝撃して彼女をピークへ押し上げていく。クリスの首の後に手を回して、セシリアは彼を力いっぱいぎゅっと抱き締めた。

「やれやれ、とんだ甘えん坊だな。でも……」

可愛がっている恋人の上半身を抱き上げて、クリスは彼女の背中に広がっている長い髪を指で梳きながら、その白い首筋に口元を寄せて自分の刻印を刻み付ける。

爆発しそうな快楽と僅かな鋭い痛みに、セシリアは喉を晒して甲高い喘ぎ声を上げた。

「……ありがとうな、セシリア」

激しい行為を通して、互いが求め合い溶け合う中、セシリアへの感謝の気持ちを零しながら、自分が刻んだ印を見て小さな満足感に浸っているクリスはギアを上げて行き、セシリアもクリスの求めに応じるように彼を深く受け入れる。

セシリアはクリスが必要としている。

没落した家から追放され、行き場を失い軍に入ったばかりの頃の彼女は、まるで死を急ぐような目をしていた。

そんな彼女の射撃腕を見込んで、別部隊から引き抜くように上司へ進言した後、さらに自分の愛情を注ぎ込んだクリスのお陰で、彼女はもう一度立ち直った。

今では四六時中クリスにべたべたしてくるセシリアにとって自分の帰る場所は軍でも部隊でもなく、クリスの隣だ。

そして同様に、クリスにとってセシリアは掛替えのない存在になっている。

バイトで溜め込んだすべての金を使い尽くしても、恩人の病気を治せなかった。最後に娘と会いたいという願いですら、叶えてやれなかった。

段々と冷たくなっていくその手を握り締めて、恩返しの一つも出れない自分の不甲斐なさを悔みながら静かに涙を流すしかできなかった。

誰も帰ってこない家なんて、もう要らない。もはや自分は、軍隊にしか居場所がない。

幸いなことに、命の奪い合いをしている時とセシリアを愛する時だけ、不思議なくらいに落ち着く。

セシリアは自分にとって最後の人間性の証かもしれない。

彼女が居なければ、自分はただの殺戮マシンになってしまいだ。

でも、オルコット家の復興なんて真っ平御免だ。平和な生活はあの幸せだった頃を思い出させてくれる。

そんなの、苦痛なだけだ。

セシリアが自分への気持ちは本物だと分かっている、彼女の願いを叶えてやれない。ならせめて恋人として、彼女を支えていこう。

そう、手のひらを合わせて共に頂点へ昇る今この瞬間のように。

「ねえ、クリスさん？」

「うん？」

荒れていた呼吸を整えた後、セシリアはクリスの腕に頭を乗せて彼の名を呼びながら、手で自分の腹部をゆつくりと撫でる。

その穏やかな微笑みは、まるで我が子を慈しむ母のようだった。

「クリスさんは……男の子と女の子、どっちが好き？」

「……おい、まさか」

「何ですかその汗まみれの顔は！？」

「いや、だつてさ……」

まだ軍に居たいし、子供とか好きじゃないし、本当なら流石にセシリアを軍に残らせるわけにも行かないし。

「酷いです……責任は取らないおつもりですね！」

「……べつにそういうわけじゃ」

「分かりました。一人で育てますからクリスさんはこの子の存在を忘れて頂いて結構です」

「くっ……わ、分かった。責任は必ず取る。今までの給料は全然使っていないから、子供一人や二人くらいなら……」

「……くすくす」

子供が苦手でも、責任から逃げるわけにはいかないし、なにより

セシリアを悲しませたくない。覚悟を決めて、クリスはセシリアと向き合って自分の考えを告げるが、なぜか彼女はクリスの顔を見て幸せそうな笑い声の漏らした。

「冗談ですわよ、クリスさん」

「……おい」

「でもクリスさんが責任を取ってくださるのなら、これからは……  
……って何をしますの!？」

「何を、だと？ 決まってるだろう。反撃だ!！」

「きやつんう……んう、んん……ちゅ……ちゅぶ……!！」

セシリアの嬉しい悲鳴が部屋に響く前に、クリスは彼女の唇を塞いだ。そのまま舌を絡めて、クリスは彼女の理性を責め崩す。

この部屋の防音性能はあまり頼りにならない。大声を出して人に聞かれたら明日は顔を合わせ辛い。

とくに向こうは一夏の部屋だ。高い確率で箒か鈴がいる。

彼女たちに聞かれたら、明日は一日彼女達の冷たい視線に晒されることになる。

まったく、自分たちの恋がうまく行かないからって、八つ当たりは止めてほしいものだ。

まあ、全年齢対応ラブコメ要員達のこととは放っておいて、今はゆっくりとセシリアを可愛がることに専念しよう。

まだ日付が変わる前だしな。

やがて二人が甘い一夜を明かして、朝が再び訪れたとき、アビアノ基地は再び動き出す。

グラウンドで汗を流す兵士、格納庫に忙しそうに走り回る整備員、副官をつれてオフィスへ急ぐ指揮官。

その中には、「ブリュンヒルデ」の隊員達も含まれていた。

「新しい左腕は問題ないな？」

格納庫の中、作業服を着た長い赤髪の青年は左腕を動かしている量産型ヒュッケバインMK-IIを見上げながら、ヘッドフォンのマイクに向かって大声で叫ぶ。

別に機嫌が悪いわけではない。ただ格納庫の中が騒がしくて、大声じゃないと相手は聞こえない。

「ああ、問題ない」

ヘッドフォンの向こうから、落ち着いた青年の声が響いた。

それは、肩に「01」と書かれたそのダークグレー色の機体のコックピットから伝わってきた通信だった。

「今度はもつと大事に使えよ！」

現地調達できるカスタム用パーツと違って、機体生産量がまだ少ない今では、量産型ヒュッケバインMK-IIの予備部品を調達するだけで一苦労だった。お陰で、黒いガリオンに潰された左腕を交換するための腕が届くのに数日までかった。

「了解した」

そう返事した後機体を元の姿勢に戻して、クリスはコックピットから出て地面へ降りる。地面にいる弾が彼に軽く手を振った後、直ぐ隣に立っている中距離支援仕様の量産型ヒュッケバインMK-IIの元に向かった。

肩に「05」と書かれているその機体は、凰鈴音のためにカスタマイズされた機体だった。

パイロットの鈴はとつくに待ちわびていたご様子で、機体の足元

で腕を組んで眉を吊り上げて、早足で向かってくる弾を睨みつけている。

整備班長殿、ご苦労だな。

同情の視線で弾を見送りながら軍服の上着に袖を通した後、クリスはポケットからDコンを出して音楽を聴きながら、壁際に置いてある備品箱に腰をかけた。

「セシリアの姉貴、今日はお肌がツヤツヤだね」

「そ、そうですか？」

「あはは、またクリスの兄貴に、頑張ってもらったんだろう？」  
整備兵と他愛ない雑談を交わしながらも、セシリアはまだコックピットで機体チェックに手間取っている。

一夏はとくに機体チェックを終えたはずだが、未だにコックピットに籠っている。多分またモーションパターンを作っているのだろう。筈は一夏のコックピットハッチの近くで彼と何かを話している。

この基地には既に一週間ほど滞在している。これ以上のんびりしていたら、退屈で勘が鈍ってしまいそうだ。幸い、機体の修理とカスタム化のテストは今日中にて終わり、明日からまた任務が始まるだろう。

そう思うと、クリスは少し気が楽になった。

「クレマン」

かれこれ考えているうちに、横から声をかけられた。  
目を向けると視界に映ったのは、長い黒髪を揺らしながら格納庫に入ってくる上官の姿だった。ヘッドフォンを外して、クリスは備品箱から立って敬礼した。

「おはよう御座います。隊長」

「うむ。パイロット全員はここに居るな？」

返礼した後格納庫全体を見渡して、千冬はクリスにそう聞いた。

「はい」

「では、パイロット全員に伝える。十分後ブリーフィングルームに集合だ」

「分かりました。……次の任務ですか？」

「ああ。詳しい状況は後で説明する。では、頼んだぞ」

「はい」

隊員の集合を頼んだ後、踵を返して格納庫から出て行く千冬を見送った後、クリスはDコンをポケットに仕舞って、地面に転がっているスピーカーを拾い上げた。

望むか望まないかに関わらず、戦場は誕生する。そしてそこが自分を満たす場所となる。

戦争中毒か。間違っていないな。

そう思いながらスピーカーの電源スイッチをオンにしたクリスは、自嘲するように笑った。

夢を、見ていた。

夢を、絶え間なく見続けていた。

そして今この瞬間も、夢を見ている。

とても不安定に揺れている、怖い夢だった。

夢の中で、銀色の髪をしている少女が辛そうに歯を食いしばって、痛みを耐えながら呻り続けていた。

自由に動けるのなら、今すぐにでも彼女を抱きしめたい。

でもそれができない。

なぜなら、私も同じ痛いを味わっているから。

頑張つて。これくらい、昨日は耐え抜いたんだろう？

心の奥底で、この言葉を念じ続ける。

手足を縛られていても、目と耳を塞がれていても、口に出さずとも、彼女にはきつと届けられる。

だって私たちは、そういう風にされたのだから。

いつか彼は必ず私を迎いに来てくれる。その時あなたも一緒に行こう。

だから、もう少し頑張ろう？

アビアノ基地から離れた荒野で、オレンジ色に塗装されている量産型ゲシュペンストMK-IEIが砂を巻き上げて、土黄色の地面を疾走していく。

やや長いバレルを持つメガビームライフルを抱えて、ゲシュペンストのゴーグル状保護カバーの奥に内蔵されているデュアルセンサーが光り、攻撃ターゲットの姿を探す。

突如、ゲシュペンストは右手のメガビームライフルを持ち上げて、銃口を前へ向けて迷わずトリガーを引いた。

バシューーン！

加速された粒子ビームが、ピンク色の輝きを放ってライフルの射線上の居たものを撃ちぬいた。装甲に風穴を開けられたターゲットが爆発して、光を上げた。

岩の後から出てきた、飛行能力を持つドローン群だった。爆発したのは、そのうちの一つにすぎない。下方に取り付いているチェーングンの砲口角度を調整して、ドローンたちはゲシュペンストへ攻

撃する。

それに対してゲシュペンストは滑走してトリッキーな動きでかわしながら連続して引き金を引き、外れのない狙いでドローンたちを撃破していく。

ゲシュペンストから離れたところに、PT輸送用のトレーラーと、移動研究室を積んだトラックがそれぞれ一台泊まっていた。

ここには、オレンジ色のゲシュペンストの行動を監視している人たちが居た。

「ドローン撃破率83%、機体損傷率18%。システム異常なし」

「おや？ 予想したより酷いな」

オペレーターの報告を聞いて、白衣を着たメガネ女が口元を歪めて顎に指を当てた。

20機以上のドローン相手に18%の損傷率ですら、この女は不満に思っている。

「量産型ゲシュペンストMK-IIの機動力では反応が出来ても、機体の方が追いついて行けません。それでもやるって言ったのは、博士ではありませんか」

隣で涼しい顔をしている助手が、言った本人が忘れた言葉を上司に聞かせた。

「そうだったけ？ まあとにかくこんな中途半端な結果では上の連中が金を注いでくれん。何とかもつと一目瞭然な数字を出さないと。例えば敵中隊を一機で全滅させるとか」

「不可能ですよ。量産型のPTでそこまで出来るわけがありません」

「だよね……キャンディー、食べるか？」

「結構です」

メガネ女がポケットから出したキャンディーを、助手は遠慮した。

「あつそ」

視線をゲシュペンストが映っているモニターに戻して、メガネ女は差し出していたキャンディーを自分の口元に送った。

「ところでさ、情報部との交渉は上手く行ってる？」

「一応。元々情報部の連中が掘り出したものだっただけに、この計画の価値を十分に理解してます」

「そうかい。じゃ機体の方は何とかなりそうだな」

面白そうに口元を吊り上げて、メガネ女は歯を立ててキャンディーを噛み砕いて、嬉しそうに笑った。

今この時に、姿も気配も消したまま、静かに忍び寄る影の存在にも気付かずに。

## Chapter - 02 甘（後書き）

セーブ……だよな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2379x/>

---

IS ~インフィニット・ストラトス~ バニシング・トルーパー リバース

2011年10月19日02時11分発行